
隻影 彼岸堂図書館目録 2

依田一馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隻影 彼岸堂図書館目録2

【Nコード】

N4217P

【作者名】

依田一馬

【あらすじ】

「とある本を回収してほしい」彼岸堂図書館専属司書の創平は、ある日財団トップの芦田俊輔から直々に依頼を受ける。なんでもその本『隻影』は『彼岸堂』から盗まれた本で、現在とある男によって質に入られているらしい。創平は上司の篠宮と調査に乗り出すが……。

ちりいん。

高らかに鳴り響くのは、古い木製の扉に取り付けられた真鍮の鐘だ。ゆつくりと『彼岸堂』の戸を押し開けると、玄関ホールはしんと静まり返っていた。唯一聞こえるのは、まだ頭上で反響している鐘の音だけである。

おや、と思ったのは、芦田財団・彼岸堂図書館管理課所属の篠宮しのみや馨かおるである。いつもならば、この洋館の二階にある居住スペースから二人分の口喧嘩が聞こえてくるのだが。今日は本当に静かだ、静かすぎて逆に気味が悪い。

彼は封書が詰め込まれた紙袋と、自身がいつも使っている黒い革の鞆を携えている。前者は全て、現在この私設図書館で専属司書を務めている男への手土産なのだが、その本人が一向に姿を現さないのでは意味がない。ふ、と篠宮は息をつく、少し長い鳶色の髪を後頭部へと流す。

そして、

「おい、詞喰鬼！」

彼にしては非常に珍しい大声を上げると、数秒後、一階玄関ホールの左側・司書室からひよつこりと一人の男が顔を覗かせた。黒く肩まである長い髪を後ろで束ね、濃紺のシャツを身に纏った彼は、不機嫌そうにその独特な赤褐色の瞳を篠宮に向けた。

「大声を出さなくても充分聞こえるぞ」

この男は、所謂美形である。こんなにしかめっ面をしていても、それが気にならないくらいに顔立ちは整っているし、正直なところ男から見ても格好いい。こんなに粗野な態度を取らなければ、きつとそれなりにもてるのだろくに、とも思う。そう、『人間』であれば。

生憎、この美形は同じ種族ではないのだ。それを理解しているか

からこそ、篠宮は劣等感を感じずに済む。人外ならば、見た目が人外であっても問題ない。そういう一方的な持論が彼にはあった。

篠宮は彼の姿を捉えると、ようやくいつもの穏やかな表情に戻った。そして、荷物を床に置きながら尋ねる。

「創平君は？ 今日はお勤日のはずだけど」

「外出中だ。きよかず清和のところに行っている」

「三代目のところに？」

困ったな、と篠宮は呟きつつ、手荷物の中から長方形の紙箱を取り出した。「仕事の話をしに来たんだけど。あ、これは創平君に。岩永屋の羊羹、確か好きだったと思うんだけど」

確かに、それは創平のお気に入りのお菓子である。その美味しさは、詞喰鬼まごか 円も本来物理的な食事は摂らなくてもいいにも関わらず、時々食べたくなるほど。さすが老舗は違う、と口にするたびに二人して称賛する羊羹でもある。

こういうまめめしいところが、篠宮の良いところでもあり、同時に円を苛立たせる要因でもある。少なくとも、本来の円はもっとクールなはずだ。それなのに、創平がやってきてからはどうだろう。彼は創平に関わることでとなると完全に人が変わるのである。鬼に対して人が変わる、という表現が適切かどうかは知らないけれど。

「仕事だなんて聞いてないぞ。正式な書類は届いているのか」

羊羹に害はない、という意味表示か、それだけはしっかりと受け取りつつ、円は尋ねた。露骨に不快そうな表情を浮かべているけれど、篠宮は敢えて無視する。

「ここにある。そもそも、今回は四代目直々の依頼だ、断れるはずがないだろう。ちょっと手ごわい話だから、事前に打ち合わせしようと思ったんだけど」

円の鋭い瞳が、篠宮の双眸を睨む。

「四代目、だと？」

嫉妬の矛先は、どうやら自分だけではなく財団幹部にまで及ぶらしい。ここまで徹底されると、逆に尊敬してしまうほどだ。

別にあの司書を誰も取って食ったりはしない、むしろ喰っているのは詞喰鬼ではないか。少なくとも、自分はそうしないだろうな、と篠宮は思う。確かにあの司書は変わり者で、ちょっと可愛いところがあつて非常に面白いが。……今のところ、壊したい願望はない。「創平君も大変だな……」

それにしても、よくこの鬼を懐柔できるなあ。そういう意味で、篠宮は内心創平を称賛するのだった……。

十

芦田邸の門を出たところで、彼・帷子創平はほっと胸をなで下ろしていた。月に一度、とある事情でこの家を訪れている創平だが、どうも落ち着かない。彼には格式が高すぎるのだ。決して育ちがよいとは言えない創平は、毎回と言つていいほど粗相がないかどうかの方に思考が持つていかれてしまい、結局気疲れて帰ってくる。この様子からすると、今回も例外ではなかったようだ。

仕事でなければ絶対に着ないスーツのネクタイを適当に緩めながらのろのろと歩いていると、向かいからやってきた一台の乗用車が突然自分の横で停車した。

「よう。今帰るか」

シルバーの光沢がやたら眩しいセルシオ。ちらりと横目で見やると、その運転席から身なりのいい、しかしどこかやんちゃそうな印象の男が顔を覗かせた。薄い金の短髪がやたら目立つこの男は、創平が非常によく知る人物である。

「佼輔さん」

創平が静かに呼んだ男　四代目團十郎・芦田あしたこうすけ佼輔が、微笑みながらひらひらと手を振っていた。そして、「乗りなよ」と右手で合図を出す。

恐縮しながらも創平は助手席に乗り込み、扉を閉めた。シートベルトに手を掛けながら、

「一体どうしたんです？　今日は箱根まで出張していると聞いていましたか」

尋ねると、まいったな、と佼輔が肩を竦めた。どうやらそんなところまで聞かされているとは思っていなかったらしい。まあもつとも、それは創平自身も今日芦田邸を訪れなければ知り得ない事実ではあったが。

「箱根は行ったよ。予定が早く終わったから、さっさと帰ってきた。後ろに土産も乗ってる」

彼が指した後部座席には、確かに乳白色の紙箱が乗っている。しかし、あれは。

「酒ですか」

佼輔は自他共に認める大酒飲みだ。コレクションも両手で数え切れないくらいにたくさん所有しているようで、自宅にもそれ専用の棚を設けるほどだ。

ハンドルを切りながら、「だってそれくらいしか楽しいことはないだろう」と口をとがらせる佼輔は、実年齢よりほんの少しだけ幼く見えた。実際のところは、創平よりも十は年上なのだが。

信号が赤に変わり、停止線に合わせて車が停まる。静かなエンジン音。背中越しに伝わる振動も限りなく少ない。その静けさに創平は正直嫌気が差していた。こういうときは、多少うるさいほうがいいのに、と思う。そうすれば、多少のことは聞き流せるのに。

「親父のところか」

「ええ、まあ」

創平もゆっくりと頷く。「ようやく三分の一、返せました」

目の前の信号が青に変わり、再び車は走り出す。止まった景色が徐々に動き始め、加速してゆく。

「別に返さなくてもいいんだぞ。別に身内なんだし、親父はそうしたいと思ってやっただけのことだ。芦田、創平君」

「その名前で呼ばないでください」

あまりに鋭い口調になってしまったことに、創平自身も驚いたら

しい。一瞬目を睜つたのち、すみませんとすぐに付け加えた。別に構わない、と佼輔は左手を振る。彼からしても、別に卑下する意図で言った訳ではないのだ。むしろ氣に障ることを言つた自分の方に非があるので、彼は一言詫びを入れたのだった。

しかし、創平は首を横に振つた。

「……まあ、戸籍上は間違いなく芦田創平ですから。その、ちよつと苦手なんです。どうもおれじゃない氣がして」

そういうもんか、と佼輔は呟いた。

創平はちらりと佼輔の横顔を仰いだが、彼は無表情のまま坦々と運転をこなすだけだった。こういうところが、佼輔のいいところだと創平は内心想う。会話に置いて、人との距離感が分かる人はなんとなく付き合いやすい。思えば、初めて出会つた時からそうだった

ぼんやりと回想しようとしたら、唐突に佼輔の声が耳に飛び込んできた。まるで諭すような、彼にしては珍しい口調である。

「お前はいつもながら、几帳面すぎる。芦田の血が少なからず入っているくせに、俺たちとは全然違うもんな。我が義弟^{おとうこ}として、将来が心配だ」

「そりゃあ、おれの大部分が全然違う遺伝子で成り立っているんだから、しょうがないでしょう」

ところで一体何の用だ、と創平が尋ねると同時に、佼輔は軽やかにハンドルを切つた。その仕草が一種の暗黙の了解のようなもので、創平はすぐに察した。

どうせ、いつものように“暇つぶし”なのだろう。嫌われていないことだけが唯一の救いだ、が、本当に彼はどこまでもマイペースだ。思わずふ、と溜息をつく、と、観念した創平は肩を竦める。

「分かりました、お付き合いしましょう。ところで、給料は出ますか？」

「篠宮に掛けあってやるよ。つか、本当にお前の頭の中は金ばっかだな。可愛い顔に似合わない」

「可愛いかどうかは別として……、世の中金です。これは事実だし真理でもある。おれはそう思っています」

そこまでさっぱりとした口調で言われてしまうと、何も言い返すことができない。俗に言うお坊ちゃん、の佼輔ですら、こんなに割り切ったことは言ったことがないし、思ったこともない。ここまで人の感性をひん曲げてしまう生活環境というやつは、本当に残酷だなあ、と佼輔はぼんやりと思った。

十

創平は佼輔の自宅であるマンションの一室を訪れていた。

芦田邸という立派な家はあるが、家主である三代目團十郎・清和と根本的な生活リズムが異なることを気にしてわざわざ別宅を購入したそう。引退してはいるものの、清和もまだ芦田財団を支える重要人物の一人だ。せめて夜くらいはゆっくりしてもらいたいという佼輔のささやかな気遣いである。

とはいえ、出張がやたら多い佼輔がこの部屋に帰ってくるのは月に数回程度。ほとんど意味がないと思われるその部屋は、実は創平が時々訪れては掃除して帰っていることから成り立つようなものである。

ところで、創平が三代目團十郎と養子縁組を結んだのがつい四年前の出来事だ。嫡男である佼輔に戸惑いや確執という感情があったかどうかと言えば、若干の疑問がある。確かに初めは互いに距離を置いていたけれど、佼輔はそういうことで神経をすり減らすよりは仲良くしておいたほうがいいだろう、と考えたようだ。おかげで創平も多少は懷いて、時々誘われては暇つぶしに付き合う程度の仲になったという訳だ。

さすが創平、掃除が上手だねえと嬉しそうにしている佼輔の横で、創平は途中で調達してきた食料品を冷蔵庫にしまい込んでいる。どうせこの人は放っておくと出来合いのおかずばかり食べるのだ。上

に立つ人物というものは身体が資本だというのに、そのあたりは無頓着だ。

ひとしきりしまい終えると、創平は独り暮らしにしてはでかいソファの背もたれにスーツの上着を掛けた。ネクタイを緩めつつ、小さく欠伸を噛み殺していると、

「そーへー君」

右耳のすぐそば、息がかかるほど近いところでゆっくりと名を呼ばれた。驚いて身を震わせると、そのままぐいと引っ張られ、次の瞬間には見上げてもないのに天井にぶら下がる照明器具が見えていた。……押し倒されたと気付くのに、そう時間はかからない。だが、どうしたらいいかという答えが全く出てこなかった。混乱し目を剥く創平の頬に、するりと佼輔の手が伸びる。押し潰してしまわぬよう、僅かに身体を浮かせる佼輔。ぺたり、と触れる掌は、ほんの少し冷たかった。

「隙だらけはよくないよ。いつ何時襲われるかなんて誰にも分からない」

「こ、こーすけさ……」

「ね？」

少し掠れた低音がぞくりと鼓膜を撫で上げる。黒の双眸が徐々に近づいて、ついに焦点が合わなくなった。

こりゃあまずい。創平は咄嗟の一言をぶつけた。

「おれ、そっちの趣味はないです」

ぴたりと、佼輔の動きが止まる。

「しかも、き、兄弟。義理だけど、兄弟ですよ。近親相姦はよくないですよっ」

数秒の後、ぷ、と頭上で佼輔が噴き出した。肩を震わせ、必死に笑いを堪える姿に、逆に創平が恥ずかしくなってしまった。何か間違ったことを言っただろうか、いや、確かに日常会話で出てくるような単語ではないけれど。どうしよう、と思っていると、

「やっぱりお前、面白い。からかい甲斐がある」

「か、からかっていたんですかッ……！」

ぼつ、と顔が赤くなるのが分かる。きっと今、ものすごくおかしい表情をしているのだと思う。そう考えるとより恥ずかしくて、正直穴に入りたかった。穴がなければ自分で掘って埋まってしまうたいくらいだ。

「まあいいや。ちよつとお仕事の話をしようよ」

「その前に」

「ん？」

「どいてくれませんか」

「やだ」

あつさり却下されてしまった。

「ちよつと怖いお仕事を頼みたいんだ。勿論サポートに篠宮の奴をつけるし、なんならあの詞喰鬼にがつり『不幸』を喰わせてもいい。頼まれてくれないか」

「内容によりけり、です」

創平の黒い双眸が狡輔を睨めつけた。仕事の話となると、先程までの面白い顔から一転、真剣な表情になる。怒っているのかと思う程に、その表情には凄味が増すのだ。それだけ、彼は『仕事』という責任の重さを理解している。やはり彼は几帳面だ。

「とある暴力団から、本を一冊回収してほしい」

本、と創平が呟いたのを、狡輔は見逃さない。正直なところ、なかった、と思った。彼を動かすには、本の話をした方が早いのだ。

「本の元々の持ち主は武下巽^{たけした たつみ}。本の題は『隻影』だ。しかし、問題があつて」

「……武下とか言う男が闇金の取立屋に追われていて行方不明、しかも本はバック・グラウンドにいる暴力団に質として回収されているとも言っんじゃないでしょうね」

「その通りだ。なんだ、やはり類は友を呼ぶってやつか」

後半の部分はさらに聞き流して、ふむ、と創平が呟いた。

「強奪……は、できないですね。一応相手が暴力団とはいえ、正当

な権利がある訳ですし。黙ってお金を払って返してもらった方が無難でしょう。ところで、なんでそんな本を欲しがるんですか」

「『隻影』は元々『彼岸堂^{ウチ}』の蔵書だ。盗品なんだよ」

それにはさすがの創平も想定外だったらしく、目をぎよつと丸くした。まさか『彼岸堂』の蔵書が外に出ることがあるなんて。あの図書館のセキュリティは、自分が知る限りそんなに軽いものじゃない。書庫に辿り着くまでに防弾扉を三枚ほど開けなくてはならないし、その鍵を持っているのも代々務める専属司書のみだ。

「篠宮から創平に引き継ぎがされる間の二年。あの時は例の詞喰鬼が一人で業務を行っていたんだが、その時にね」

創平はようやく理解した。円一人なら、今のような徹底した管理はできないだろう。なにせ相手は詞喰鬼だ。『不幸』には恐ろしいほど執着するが、本それ自体にはあまり興味を示さないのだから。

どうせ答えは「はい」と「イエス」と「了解」と　そう考えたところで、創平の頭の片隅に円の姿が浮かんた。そうだ、どうも円と狡輔は根本的なところが似ているのである。狡輔が芦田家においてはかなり珍しい、詞喰鬼の姿が『見えない』身体だから、きっと狡輔は知る由もないだろうが。

分かりました、と頷くと、狡輔はひとつだけ頷いて、おもむろに起き上がった。ようやく拘束状態から解放され、ほっと安堵したのもつかの間。

上体を起こした創平の頭をぽんと叩く。狡輔は無表情のままだ。

「ま、義兄弟^{きょうだい}じゃなければ、とは、時々思っけど」

「え？」

「さっきの、俺は結構本気だったんだけどさ」

ぞわ、と猛烈な寒気が襲った。

もやもやとした気持ちを胸に抱いたまま、ようやく創平は『彼岸堂』に戻ってきた。佼輔が「送ってやる」と喰い下がってきたが、丁重にお断りしてきた。別にそう距離がある訳ではないし、何より頭の整理がつかなかった。だから、歩いて頭を冷やそうと思ったのだ。

随分ゆつくりと歩いていたので、『彼岸堂』に着いた頃にはもうすっかり外は暗くなってしまった。先程まで己の左側を照らしていた燃える西日の熱を恋しく思う。

彼の頭の中では、先程の佼輔の言葉が延々と繰り返されていた。
義兄弟きょうだいじゃなければ、とは、時々思う

そんなのごめんだ。というか、

「どうしておれの周りには趣味がずれた人が集まるんだ……」

帷子創平、二十五歳。好みのタイプは巨乳女子、を自負しているのにも関わらず、未だそういった縁はない。むしろその逆ばかり集まってくるのは何故だ。からかわれているのならそれで構わない。しかし、先程の言葉を吐いた彼の目は。

間違はなく本気だった。

初めて会った時とは大違いだ、と創平は小さくため息をつく。

彼らが対面したのは、創平が十九歳のとき。某暴力団事務所の中という、明らかに普通でない場所での出来事だった。今だから平然と回想できるが、勿論シチュエーションもかなり普通でない。

当時帷子少年は、いつもの賭博場（無論、非公認である）で、一番得意な花札で、いつものように生活費を稼いだけだった。まあ多少のいかさまはしたけれど、そんなものこの世界では常識である。誰でもやっていることだ。それなのに。

この日は、相手が悪かった。

いかさまがバレて、やたら敵つい男どもに引きずられてやってき

たのがこの暴力団事務所である。帷子少年、神経だけは図太いと自負していたものの、さすがに肝を冷やした。まさか拷問だろうかと身を固めたが、実際はそれ以上に卑劣な行為が待っていた。

服を裂かれねつとりとした息を吹きかけられ。肌を撫でられる感覚は今でも忘れない。恐いと初めて思った。拷問だったならばどんなによかったか！

本格的に事に及ぶという寸前、ドアを突き破ってきたのが、後の四代目團十郎・芦田佼輔だった。

後から聞いた話だが、芦田財団は一年以上『とある事情』により借金まみれの帷子少年を監視していたらしい。当然彼が失踪した両親に代わって借金を返済すべく賭博で金を稼いでいたことは把握していた。毎回大勝利を収めている彼だから、監視側もまさかこういう状況になるとは思っていなかったようで、慌てて突入したのだと言っ。

そして、この後『とある事情』を聞かされた帷子少年は、三代目團十郎・清和と養子縁組を結ぶことになる。当時の借金は三代目が全額肩代わりした。『とある事情』を果たすべく、創平を司書にしようと大学にも入れた。こういう経緯があるため、創平は芦田財団に頭が上がらない。全うな道に引き戻してくれた恩を返したい。そう考え創平は、自分で稼いだ全うな金を三代目に地道に返済し続ける。現在、ようやく三分の一返済できた。

そんな訳で、佼輔はいわば創平にとつての救世主だったのである。それなのに、だ。たまに呼び出されて半端に遊ばれるとなると、その信頼すらも崩れ去るというものだ。

ただいま、と戸を開けると、玄関先に自分のものではない革靴が並んでいた。

これは、と思うと、奥からその本人が顔を覗かせる。

「あ、創平くん。おかえりなさい」

「篠宮さん」

彼 篠宮馨は、先述の通り創平の直属上司である。かつては『

彼岸堂』の専属司書も担当していたのだが、円とは面白いくらいに馬が合わなかった。だからこんな場所に彼がいるはずはないのだが、そう考える創平に彼はにこりと笑いかけ、ゆつくりと手招きしてくる。

「お腹すいたでしょう？ ご飯はできているよ。よければ」

その時、奥からひよこつと円が顔を覗かせた。創平を見るなり露骨に顔をしかめたと思ったら、速足で近づいてきて、そして首筋に鼻を押し付けた。まるで大きな犬だ。伊達に長生きしていないはずなのに、人間らしい行動というものをなかなか覚えてくれない。

「うわ」

「…… 佼輔の匂いがする。一緒だったのか？」

きらりと紅玉の瞳が光る。こういうところだけやたら鋭いのが円だ。まあ一緒だったのは事実だし、別に彼が不満に思うようなことはなにひとつやっていないつもりなので、「ああ」とやんわりと頷いておいた。

しかし、いつもならば「ああ、そう」くらいで済む反応が、今日は違った。珍しく必死に創平の顔を覗きこんで、

「何かあったろう」

としきりに尋ねてくる。やはり変なところで鋭いのだ、この鬼は。しかし先程の一件を話そうものなら、翌日あのマンションは血濡れの大惨事になっている。それだけは勘弁してもらいたい。創平は円の肩を叩きながら、へらへらとした作り笑いを浮かべた。

「大丈夫だから。曲がりなりにも、おれの兄弟だぞ」

「だからだよ」

どきりと心臓が跳ねた。その動揺した表情を、後ろで見ていた篠宮も異変として捉えたことは事実だった。

十

篠宮が珍しく『彼岸堂』を訪れたのは、やはり佼輔直々に連絡を

受けてのことだった。創平に話す前から彼の元へ依頼されていたらしく、むしろ創平の方が事後報告という扱いになっていたのは言うまでもない。

二階の奥にあるダイニングに何故か三人で座り、少し早めの夕食を摂ることとなった。出来たばかりの煮物を小皿に盛り分けながら、篠宮はにこりと微笑んだ。

「早速明日武下の部屋に行ってみようと思うんだ。詞喰鬼、そういう訳で創平君を借りていくよ。答えは聞いていないから、安心して」
「どこが安心できるんだ馬鹿」

本日も例外でなく、篠宮と円が喧嘩し始めた。創平は円をなだめつつ、わざわざ篠宮が準備してくれていた夕飯に箸をつける。半分住み込みで働いている創平は、『彼岸堂』で食事を摂ることの方が多い。だから食材も調味料も一通り揃っているが、しかし何故篠宮が料理していたのか。それだけは未だに理解できずにいた。

というのも、篠宮の料理は美味しくないのである。

味オンチの創平は美味しく頂けるが、その他の人々にはお断りされる方が多い。それを篠宮自身も理解しているのにも関わらず、だ。少しだけ辛い煮物をつまみながら、創平はぼんやりと考える。……篠宮は、円ほどとは言わないが察しのいいところがある。もしかしたら、元気がない状態で帰ってくることを予測して準備してくれていたのかもしれない。また心配かけてしまった、と創平の気分が沈み始める。

左手首の痣がちり、と痛んだ。

「聞いてる？ 創平君」

「え？ …… ああ、すみません」

「しっかりしてよ。それで、創平君は四代目から聞いているのかな」
「ああ、はい」

武下巽のことですね、と頷く。「詳しいことはあまり。ただ、『隻影』が『彼岸堂』から持ち出された盗品であることは聞いています。とすると、武下が窃盗を行ったのでしょうか？」

「違うよ、彼じゃない」

さっぱりとした口調で篠宮が答えた。さすが前任者、勤務期間は短いものの『彼岸堂』に所蔵されている本の経緯は把握済み、という訳だ。

「元々『隻影』の持ち主は武下巽の御尊父にあたる、武下進のものだったんだ。それを、三代目率いる芦田財団が半ば強制的に回収してしまった。勿論理不尽な理由ではないよ。でも、当時の三代目はちよつと強引なところがあつたから……ああ、強引なのは彼に始まつたことじゃないか」

確かに、芦田の血筋の者は皆強引なところはあるが。その一部が自分の中にあると考えると、創平はほんの少しだけ嫌気がさした。もつと歳を重ねていったら、自分もあの三代目・四代目のようになるのだろうか。もつと穏やかに暮らしたいものだ……。

またろくでもない方向に思考が持っていかれたところで、はつとした創平は篠宮に続きを促した。

「その、理由というのは？」

その質問に、今度は円が口を開く。

「創平。呪詛って分かる？」

あまりに唐突な質問に、え、と口を開け広げた創平。しかしすぐに、彼の頭の中に内在する語彙の引き出しを開けて簡潔に答えた。

「恨みに思う相手に災いが起るよう神仏に祈願すること。広辞苑参照」

「正解。さすが俺の創平君」

いつからお前になった、と小突くも、円は気にせず話を続けた。

「普通は俺だつて、そういう類のものを無理やり奪おうなんて思わないさ。芦田のおっさんですら嫌がついていたからな。だが、どうしても取らなければならなかった」

「……その理由が、呪詛？」

こくりと円が頷いた。

「武下の家系、かな。細かい経緯はよく分からないが、どうやらその本はかなり昔に武下の住む村にふりかかった災いを封じ込めたものらしい。武下の家系はその守人……いや、生贄か。当時はあの家に呪詛を抑える祈禱を行える者がいたんだが、武下進の二代前に潰えてしまった。六十年くらい前にでっかい戦争があつたろう、その時に最後の一人が死亡したそうだ。守る術のない状態で武下の元へ置いていたら、とんでもないことが起こるかもしれない。だから戦後から、財団二代目の……えーと、泰守^{やすもり}か。あいつが武下にずっと交渉し続けて、進のときによく預けてもらえることになった」

随分と長く続いてきた問題であることは理解できた。ふむふむ、と創平が頷いていると、きらりと円が鋭い視線をこちらに向けてきた。その視線にどきりとして、思わず煮物の椎茸を取り落としそうになった。

「他人事だと思いやがって。敢えて言っておく、その呪詛を抑えるのはお前の仕事だぞ」

「はい？」

そのリアクションに、ああやはり知らなかったのか、と円と篠宮はやたら長いため息をついた。知らなかったのは当事者だけ、という奇妙な構図だったようだ。ぽかーんと呆けていると、補足説明のために篠宮が口を開いた。

「創平君。君はどうして三代目のところに養子に来たの？」

「え、初代が持っていたはずの“痣”が、隔世遺伝でおれに引き継がれてしまったから……？」

分かつてるじゃん、と円が口をはさんだ。

「“痣”がある、すなわち不幸に反応して言霊に火を灯すことができるのは團十郎の他に創平君だけなんですよっ！ だから『隻影』をさつさと燃やしてくれば、あとは俺が呪詛ごと喰うことができるんだ。あーもう、創平がここの司書になるっていうから、資格を取るまで四年も待っていたのにさ」

あーそうか、と創平がようやく納得して、数回頷いた。ここまで

辿り着くのにもすごい時間と労力をかけてしまった。いや、初めに説明しておかないと、倭輔がいけないのか。円はわざとらしく息を吐き出す。

「ずっと待っていたんだぞ。團十郎以降、本家には“痣”を持った人間が誰ひとり生まれなくて。倭輔に至っては見鬼の才すらないじゃないか。まさか妾の方に“痣”が引き継がれるとは思っていなかった」

だから、と円は鋭い口調で言い放った。

「総じて一〇七年も俺を待たせた分、きっちり働いてもらうぞ。帷子創平！」

翌日、創平と篠宮は例の武下の家へと向かっていた。ちなみに円は、今回は留守番すると言って早々に書庫に籠ってしまった。……よほど篠宮が嫌なのかは知らないが、まあ、喧嘩を宥めるという仕事が減っただけで大きな収穫である。

行きの運転は創平が担当することになった。すでに癖になってしまった情性運転。通常仕事での運転の際、創平は大抵車が苦手な円を助手席に乗せて走っている。本人曰く「文明の利器にはついていけない」。一応は妖怪だということを認めているらしい。

それ故の情性運転だと篠宮も分かっているので、敢えて何も言わずに助手席で手持ちの資料を広げていた。

「円のやつ、あれだけ『仕事しろ』と言っておきながら……」

ぶつくさ文句を言いながら創平はハンドルを切る。左手で朝に結んだタイを緩めながら、昨夜の円を回想する。ここ二年ほど一緒にいるけれど、あそこまでガツンと言われたことはない。よほど『隻影』なる本を奪われたことが悔しかったのだろうか。

それにしても、

「……呪詛、ねえ」

篠宮が創平の呟きにきよんとしている。

「創平君は、そういう類のものを信じないタイプ？」

「いや、どちらでもいいというか……。現に普段妖怪の相手をしている訳ですから、まあ、否定こそしません」

はあ、と溜息をつき、己の手首をちらりと見つめる。時計のベルトに隠れて見えないが、今もその下では鎖の痣が縹色の光を放ちながらそこに在る。これがある以上、芦田家から逃れることはできない。

妖怪との契りを今も尚守り続ける彼の血筋　世の中、本当に不可思議に満ち溢れている。例えば、蒼く光る手首を持つこの自分、

とか。

それにしてもよく光るなあ、と呟くと、篠宮もその言葉の意味するところに気が付いたらしい。横目で左手首を見遣ると、僅かに首を縦に動かした。

「創平君……は、その痣、嫌？」

篠宮の突然の質問に、創平は驚いて目を瞠っていた。質問の意図が分からない。どういうことを言えば正解なのだろうか、と瞬時に考え、「そうですね」と呟いておく。

「嫌、ではないと思います。正直、そのへんはおれもよく分からないですよ。この“痣”にしろ、生まれた時からの付き合いがある訳で……。あ、知っているとは思いますが、その時は光っていませんでしたし」

今は、と創平が絞り出す声色を見せた。「直接、濃い繋がりではありませんが……目に見える家族の形なんじゃないかなって思う。だから嫌ではないんですが、ちょっと戸惑いますね」

そりゃあそうだ、と篠宮が微笑んだ。

「いきなり取り巻く環境が一八〇度変われば、気持ちの方は追いつかないでしょう。それが普通だと思うよ」

それよりも。創平は胸の内ではこりになっている疑問を、篠宮にぶつけてみることにした。

「ところで、篠宮さん。その武下巽は独り暮らしなんですか？」

篠宮は資料をめくりながら、首を横に振る。

「いいや。四歳になる娘さんがいるはずだよ。ええと……桜ちゃんだったかな」

どうしてそんなことを？ と尋ねる篠宮に、創平は「はあ」とため息にも似た曖昧な返事を返し、ゆっくりとハンドルを切った。その表情は、どこことなく険しい。目を細めながら何かを思案している様は、苦悶の表情に似ている。創平は今、何か複雑なことを考えているに違いなかった。現に、きよとんとしたままの篠宮に対してぱつりと一言。

「……その子、親御さんと一緒なんでしょうか」

「うん？　どういう意味？」

「なんでもありません、おれの考え過ぎです」

しばらく走って、車はとあるアパートの前に停まった。この一階、一番奥の部屋が武下の借りている部屋である。

アパートの外観は至って普通。茶色の外壁は少し古びてはいるが、他にも住民はいるようだし、手入れも行き届いているようだ。武下の部屋の前までやってくると、玄関先にビニール傘がふたつ、無造作に立てかけてある。どちらもコンビ二で売っているような、大人用の大きさのものだ。

部屋に彼がいなかったとは分かりつつも、念のため創平はインターフオンを押した。数回、気の抜けたベルが鳴る。……案の定、返答はない。

「篠宮さん、どうします？　一応入ってみますか？」

うん、と篠宮が首を縦に振る。

「その前に、ここの管理人さんに許可を得ないとね。俺たちは一応芦田財団幹部だ。信用を商売にしている訳だから、あまり公にできない方のような荒っぽいことはするべきではない」

確かに。あくまでこちらの目的は『隻影』の奪還であり、それ以上の上のことはしてはならない。それこそ本を担保に持っていてしまった某の暴力団とやっていることが同じになってしまう。

「管理人さんは住み込みではないんですね。ええと……住所は、と」

創平が手持ちの住所録を開こうと手提げを探ると、突然部屋の扉が開いた。かちやり、と。控えめな音を立てて。

まさか武下が帰っていたのか、と驚いて身をこわばらせるも、それはどうやら違うようだとすぐに理解した。ドアの隙間からふたつの丸い目がじつとこちらを見つめていたのである。

「……おじさんたち、だあれ？」

拙い口調で、『彼女』は尋ねた。

これが、まさか武下の娘だろうか。背格好も資料に記載されていた年齢と合致しているので、確かだとは思うが。創平が返答に困り篠宮を見遣ると、彼は一度首を縦に振り、彼女の背丈に合わせてしやがみこんだ。そして、いつもの優しい微笑みを彼女へと向ける。

「こんにちは。武下桜ちゃんだね？」

隙間から覗く小さな目はぱちくりと瞬きを繰り返し、おずおずと肯定の意を示す。どうやら、完全に警戒されているらしい。普通に考えて、黒スーツの知らない男が二人でやってきたら、そりゃあ警戒もするだろうが。特に武下の現状を考えたら、こういった出で立ちの男はひっきりなしにやってくるだろう。むしろ彼女がこうやって対応してくれていることに感謝するべきだ。

「おじさんは、パパのお友達なんだ。パパはいるかな？」

篠宮の優しい声色、そして「パパのお友達」の言葉に反応してか、次第に彼女は心を開いてくれたようである。彼女は力なく、首を横に振った。

「おでかけ……なの」

彼女は短く、そう言った。瞳が徐々に虚ろになってゆく。篠宮がその異変に気がついたのと、創平がふと異様な臭いを感じ取ったのはほぼ同時だった。

……アンモニア臭？

同時に蘇る記憶。この臭い、とてもよく知っている。ほんの少し前、それこそ芦田の名になる直前までは結構な頻度で嗅いでいた。その異臭は、この部屋の中から漂っている。普通、こんな臭いするか？ 普通のアパートだぞ、どこぞの路地裏じゃあるまいし。創平の頭の中では警鐘が鳴り響いていた。いけないとは分かっているけれど。

「ごめんね、失礼するよ！」

いてもたってもいられなくなり、創平が無理やり戸を開けて、中に入り込んだ。一応玄関らしいところで革靴を脱ぎ、転がるようにして飛びこんでゆく。ドアに身体を預けていた少女はその支えを失

い、ふらりと前へ倒れ込んだ。それを篠宮が抱きかかえる。四歳の子供にしては随分軽い体だった。

「創平くん！」

勝手に入り込むのは駄目だ、と制止しようとした篠宮だったが、創平がたった今飛び込んで行った扉の向こう　小さな部屋の中の様子を目の当たりにし、ぎょっとしたまま固まってしまった。

高さの低いテーブルの上には、空の平皿が一枚。縁に澱粉が固まりこびりついた跡が残っている。皿の上には食べ物が入っていたビニール袋が無造作に転がり、そして同時に妙な色の液体が水溜りを作っていた。しゃがんで観察すると、それはどうやら尿らしかった。つんとしたアンモニア臭が鼻につく。蠅が部屋の中を無数に飛びまわり、今入ったばかりの創平の体にも何匹かまとわりつき始めた。こぼれ落ちた食べかすを求めて、蟻が数匹紛れ込んでいる。

創平は無表情のまま、冷蔵庫の中を開けてみた。空っぽだった。あるのは、汚れた空の製氷皿が一枚だけだ。それを開け放ったまま、今度は部屋中の戸棚という戸棚、全てを開け放った。食べ物らしきものは一切ない。

全てを確認し終え、創平は一度だけ天井を仰いだ。茶黒い板に、飛び交う蠅。

ゆっくりとした足取りで、創平は篠宮と彼女の元まで戻ってきた。そして、ぼつりと一言。

「篠宮さん、児童相談所に通報します。構いませんね？」

十

『そうか……分かった。武下が行方不明には違いないんだな？』

はい、と篠宮が短く返事する。

彼は先程児童相談所に通報した。調査官はあと一時間もしたらこちらに着くそうで、それまでは創平・篠宮両名はこの場で待機することになった。その間に篠宮は佼輔に連絡を取り、「おそらくそち

らにも調査がいくと思われそうです」とやや事務的な連絡をしている。

『それは構わない、こっちは清廉潔白もいいところだからな。それより、創平は？』

「創平君なら、桜ちゃんについてあげていますよ」

ちらりと開け放った玄関から部屋を覗きこむと、創平はぐったりとしたままの桜を膝に乗せるようにして抱きかかえていた。本当は寝かせるのが一番だろうが、この汚れた畳の上に横たわらせるのはいただけないと判断したのである。

彼らは通報した後、すぐに近所にあつたスーパーにかけ込み、女児用の服を一式、それから掃除用具を買ってきた。幸い水は止められていなかったたので、創平は彼女を風呂に入れてやり、新しい服に着替えさせた。桜は始終ぼんやりとした様子だったが、それでも創平を悪い人だと思わなかったらしく、服をぎゅっと握ったまま離れなかった。食べ物を用意するのとはよくないだろうから、と代わりに電解質を少しずつ口に含ませてやると、彼女の容態はほんの少しだが落ちついてきたようだ。

『もしも創平が使いものにならなくなったら、その時はお前ひとりで対処してくれ』

「無茶言わないでくださいよ。その時はあなたにも動いてもらいます、四代目」

では、と一方的に篠宮は終話ボタンを押し、上着のポケットに携帯を放り込みながら創平の元へと戻る。創平はのろのろと顔をあげると、

「篠宮さん、どうでした？」

と静かに尋ねてきた。彼の腕の中で、桜が眠りに落ちたところだったのである。

「あと一時間くらいで家庭調査官の方がいらっしゃるそうだよ。そうしたら、……そうだな。一応は保護してもらえ。俺たちも明日聴取を受けるから、そのつもりで」

「聴取、ですか。分かりました」

力なく返事をし、創平は再び目を伏せる。不安を隠しきれないらしく、肩を僅かに震わせていた。そんな彼の横に篠宮も腰かけ、できるだけ優しい声色で話しかける。

「大丈夫。ある程度四代目が手を回してくれるそうだから、俺たちはありのままを伝えればいい」

「佼輔さんが？」

そっか……、と創平が首を動かした。「……また、佼輔さんに迷惑かけちゃったな。強制執行じゃあるまいし、勝手に部屋に突入しちゃいけないって分かっていたのに」

「いや、あの人の場合創平君に頼られる方が嬉しいんだと思うけど……勝手に突入したのはよくなかったね。でも、今回はやむを得ない事情があつた。次から気をつければいいんだよ」

「はい」

短く返事した後、創平はぴくんと何かに反応して顔を上げた。そして辺りをきよろきよろと見回し、緊張した面持ちのまま声を絞り出す。

「篠宮さん、」

「黙って」

篠宮もまた、何らかの異変に気がついたらしい。創平の言葉を制止し、瞳だけを動かして辺りを観察し始めた。しばらく沈黙していると、かさり、と何かが動く音がした。

人間の気配だ。

二人は玄関を睨めつけた。そこには、先程まで存在しなかった黒服の男が二名。土足のまま無造作に部屋へと侵入してくる。ひとり、恰幅のいい中年の男。黒縁の眼鏡をかけており、頬が脂ぎっている。対してもうひとり、背が高く、細身の美丈夫だった。長めの前髪が表情を隠しているが、おそらくこの中年男同様、あまりいい目はしていないのだろうなと思う。

彼らを見るなり、創平は目を剥いたまま固まってしまった。勿論、

それに篠宮が気づかないはずがない。横目で創平の青ざめた表情を確認すると、篠宮が口を開く。彼に話をさせるのはよくない、という判断だ。

「感心しませんね、それ」

と彼らの足元を指して言う。「一応土足厳禁ですよ」

「お前ら、芦田の回し者か」

中年男がニヤリと品のない笑みを浮かべた。篠宮の指摘など一切耳に入っていないようだ。ただ、彼らは創平と、彼の腕の中で眠る桜をじつと舐めるように見つめ、納得したように首を縦に振るのみだ。

「……こんなところで感動の再会を果たすとは。帷子創平君、だっけ」

中年男の発言に、創平は身をこわばらせた。驚いたのは篠宮の方である。まさか、この黒服たちと面識があるのだろうか？ いくら創平の育ちがあまりよろしくないとは言え、彼らは本物の暴力団関係者だ。

おそらく、武下が金を借りたという高利貸しのバック・グラウンドにいるのはこの男たち。『隻影』はきっと彼らが持っているだろう、と考えていた篠宮にとって、それはあまり良い知らせとは言えなかった。

創平はじつと褐色の瞳を男に向け、静かに息を吐き出す。

「まだ生きていたとは。てつきり四代目が解体したんだと思っ
ていました……確か松本組の行平氏ゆきひらでしたね」

篠宮さん、と彼は名を呼んだ。「桜ちゃんを頼みます」

戸惑う篠宮に、創平は桜の身体を引き渡した。そして、きちんと締めていたネクタイを緩め、首元をくつろげる。

「覚えていたんだね。いや、忘れるなんてできないか？ 何せ、」

「言うな」

ぴしゃりと創平が中年男の言葉を遮った。「……『隻影』はあなた方のところに？」

それが確認できればいい。創平の口調からはそんな意思が見え隠れしていた。彼の真剣な面持ちから、中年男も何かを悟ったらしい。後ろにいた美丈夫に顎を使い何かを指示する。彼はひとつだけ首を縦に動かし、懷から一枚の紙を取り出した。

「確かに、『隻影』は我々が預かっている」

その紙が念書だということに、創平はすぐに気がついた。本来物の引き渡しさえあれば成立する権利だというのにわざわざ念書を書かせるなんて、よほどアレが必要だったのか。創平が小さく舌打ちしている。

「その本は我々、芦田財団の所有物だ。登記も既になされている」

篠宮が反論する。質に入ってしまった以上、この言い分は通るはずはない。無駄だとは分かりつつも、言うべきことは言ってしまった方がいいたろうと考えたのだ。しかし、この篠宮の発言も完全に無視されている。彼らにとつて、篠宮などどうでもいい人物のひとりであることには違いなかった。

「篠宮さん、」

あとはおれが、と言いかけた創平の言葉を、篠宮が遮った。

「それよりも、武下巽をどこへやった」

篠宮の問いに、ようやく中年男が反応した。まさかとは思っていたが、武下の存在が彼らの登場と何らかの因果関係を結んでいるらしい。創平はじつと中年男の右肩を見つめ、なにかを思案している。男たちはそれに気がついていない。

「こつちが聞きたいね。俺たちだってあいつを探している。ここに来ればもしかしたら、と思ったが……」

いなかった、という訳か。

篠宮はこれからどうするべきか必死になって考えていた。あともう少し時間があれば、児童相談所の職員がやってくる。なんとかそれまでに帰ってもらうか。否、少し面倒な話になるけれど、ここは敢えて職員に発見してもらったほうがいいのかもれない。後処理は狡輔がやってくれるはずだ。

そんな篠宮をよそに、創平は全く別のことを考えていたらしい。

「行平氏。『隻影』は、相模氏が持っているのか？」

創平が唐突に口を開いた。未だ目線は中年男 行平の右肩に向けられている。

「あんたらに教える筋合いはないぜ。なに、帷子君が若頭に『直訴する』ってんなら話は別だが」

中年男は一本煙草をひっかけ、ライターで火をつけた。紫煙がむわりと彼の周りに立ち込める。直訴、の一言にやたらアクセントがついていた気がするが、気のせいだろうか。篠宮が考えていると、創平が声を上げた。

「おれが行けば相模氏と面会させてくれるのか。その武下桜には手を出さないか？」

男が桜を一瞥する。そして、中指を人差し指で煙草を摘み、ふうと煙を吐き出した。

「体で訴える気か。それなら間違いなく了承するだろうよ。互いに大ごとにはしたくないだろ？」

「……分かった」

創平が一人で納得し、彼らについて行こうとした。それを篠宮が制した。

「創平君、まさか君、」

ひとりで向かう気か、と言いかけたところを、創平が制止した。

ただ、彼は困ったように微笑んで。

「ちよつと出かけて来ます。桜ちゃんを、よろしく願いしますね」

実に柔らかい口調でそう言い放ったのだった。

呆気にとられている間に、創平は男二人と部屋を出て行ってしまった。ボタンと玄関の扉が閉まる。その音でようやく我に返ったのか、篠宮は自分の車の鍵と携帯、それから桜を同時に抱え急いで靴を履いた。そして玄関を飛び出す。

そこには既に男たちと創平の姿はなく、随分遠くの方で赤いテ-

ル・ランプが光っていた。車は右の路地へ進んでいく。

篠宮も追いかけるべく車に乗り込み、桜を助手席へと乗せた。児童相談所の職員はもうすぐやってくる。しかし、それを呑気に待っていたら創平が危険だ。篠宮は数秒社会の常識について思索し、その常識とやらを思い切り蹴り飛ばすことにした。

そこで彼女はようやく目を覚まし、まだ力の入らない腕を篠宮へと伸ばしていた。

「おじちゃん……？ どうしたの？」

「ごめんね。ちょっとドライブに付き合ってくれないか」

微笑みを浮かべ、そして同時に右手では佼輔へのコールを。佼輔はすぐに出た。篠宮は「すみません」と前置きした後現状を告げると、予想通り佼輔の罵声を浴びることとなった。

『馬鹿野郎！ 松本組と創平を一緒にするんじゃないって再三言っただろうが！』

「申し訳ありません……。しかし、その件について私は初耳です。彼は組と関わりが？」

携帯を耳と肩で挟みながらエンジンキーを回す。独特の爆音と振動が伝わり、背筋に奇妙な揺れを伝える。否、奇妙と思ってしまったのは、次に聞こえた佼輔の一言のせいだろうか。

『松本組の相模は、六年前、博打でイカサマした創平を強姦した奴だ！』

未遂だけど！ という親切的な補足説明は、度肝を抜かれた篠宮が携帯を落としたため、一切届いていなかった。

その頃創平は二人の黒服に連れられ、とある事務所へとやってきていた。この組の前の事務所はもつと閑散とした場所にあったのだが、今はその真逆・なんと歓楽街のど真ん中に位置しているようだ。運転は美丈夫が行った。その間創平は中年男・行平と二人で後部座席に座っていたのだが、奈何せんこの行平が執拗に手やら腹やらに触れてくる。創平はさすがに頭にきて、数分前にぶん殴ってやった。彼らしくない汚い脅し文句を徹底的に行使した結果、事務所についた頃には、すっかり中年男と創平の立場が入れ替わっていた。

「相模氏はここか」

尋ねると、彼は「ええ」とやたら丁寧な口ぶりで頷く。彼らの間に具体的になんかあったのかは、あの美丈夫以外知る由もない。

創平は彼らに案内してもらい、ビルの四階に位置する事務所までやってきた。先に中年男が入り、相模氏にかけあってくれるそうだが相手はヤクザ者ではあるが、一応こちらはアポなしで来た人間。それなりの手順を踏むのが表裏問わず社会の基本というものだろう。

しばらくそのまま待機していると、中年男が戸の隙間から顔を出した。

「入れ」

と短い一言。どうやら本当に話を通してくれたらしい。創平は無言で首を縦に動かすと、事務所へと足を踏み入れていった。

事務所の中には二人掛けのソファがひとつと、高さのある棚がいくつか。奥にもうひとつ部屋があり、どうやらそちらが相模氏の本拠地らしい。前に連れてこられたときよりも、些か簡素さが増した気がするが……まあ、それはかの義兄の功績ということにしておこうと創平は思う。

「連れて来ました」

行平が奥の扉を開けた。創平は一瞬ためらいを覚え、自然と立ち

止まる。脳裏によみがえる忌まわしい記憶。しばらく考えて、それらを全てなかったことにした。いい加減断ち切らなくてはならない。例え一生忘れることができなかったとしても、それをずっと引きずってはいけない、と思う。

あの日、佼輔が飛び込んでこなかったら。間違いなく、今の自分はなかった。こういう風に物を考えることもなかったはずだ。だから今度は、己の手でそれを引き離すべきなのだ。

創平は、ゆっくりとした足取りで部屋へと足を踏み入れた。

「久しぶりだね、帷子創平君」

彼の目線の先には、一人の男が居る。黒の髪は後ろで一つに束ねられ、無精髭を蓄えた男は、穏やかな部類の表情で創平を見つめている。彼が創平の言うところの「相模氏」さがみれいいち。相模礼一。現松本組の若頭である。最後に会った時よりも、大分痩せてしまった気がした。

「どうも」

創平は短く切り返し、軽く会釈する。そして、相模の右肩のあたりをじっと見つめた。しばらくそのまま彼の動向を観察し、納得したのか首を小さく横に振った。

「てつきりくたばったと思ったんですが」

「嫌な冗談はよしてくれないか。こちらこそ……、君がまさかまた姿を現すだなんて思ってもみなかった」

座るように指示されたので、一礼した後対面式のソファに腰かけた。後に美丈夫の方が茶を出してきたが、それには一切手をつけず、じっと創平は相模の右肩を見つめ続けている。

「それで？ 君の用件はなんだ。なんとなく予想はつくが」

「なら話は早い。単刀直入に言います、『隻影』を返してください」
慇懃無礼な口調で創平は言い放った。「彼岸堂うちの所有物だってことは、一応知っているだろう？」

「ああ、あれか」

それなら、と相模はおもむろに立ち上がり、引き出しから何やら

取り出して見せた。藍色の紐で仮綴じにされた状態の、痛みがやたら激しい「本」だ。

実物は見たことがなかったが あれが、探し求めていた『隻影』だろう。それ、と珍しく動揺した声を創平があげるも、相模はその本を己の横に放り出してしまった。それ以上こちらに見せる気はないようだ。

「これ、一応担保だからさ。無条件で渡す訳にはいかないよ。なにせこつちも商売がかかってる」

「それじゃあ、条件が揃えば引き渡してくれるんですね？」
「考えてもいい」

その条件はなんだと問う前に、彼はもうひとつ、創平と相模を隔てる高さの低いテーブルの上に何かを乗せた。鮮やかな色彩と緻密な絵柄が放つ、小さな美術品。

花札だ。

創平は目を睜り、確認するために再び顔を上げる。

「イカサマはなしだ。君が勝ったら、『隻影』を渡す」

「おれが負けたら？」

「言わなくても分かるでしょ？ 一度そういう目に遭ってるんだから、さ」

にこりと笑った相模の表情に、創平は背筋が凍りついた。彼が言わんとすることはなんとなくだが理解した。その証拠に、相模はやりわりとした口調で決定的な言葉を投げかける。

「今回、本当に手に入れたかったのは『本』じゃなくて『君』だから。帷子創平君」

十

篠宮は車を走らせる。助手席には桜が座り、困ったような表情を浮かべながら彼の横顔を見つめている。

彼は先程の電話で佼輔から指示を受けた。まずは『彼岸堂』に行

き、そこから円と佼輔自身を車に乗せること。『彼岸堂』に着くまでに佼輔が松本組の現本拠地を調べると言っていたので、それからほぼ直行だろう。

桜を連れていることも佼輔に伝えてあるので、児童相談所になんらかの連絡はしてあるはずだ。だが、どう考えてもこれはただの幼女誘拐である。篠宮の脳裏にぼんやりと「これで前科がつくのかな」という妙な一言がよぎったが、今更だ。

そう思っていると、桜が突然口を開いた。

「おじちゃん……おとうさんのところにいくの？」

どうして？ と篠宮は答えた。その声色に自分らしからぬ焦燥感がにじみ出ており、それが彼女を不安にさせているようだ。桜の声は、それだけ不安そうにしていたからだ。

「さっきのこわい人の肩にね、おとうさんがいたから……おんぶしていたんだよ」

心臓が跳ねた。

まさか、と篠宮は思う。彼女是我々芦田財団が言うところの「見鬼」なのだろうか。そういえば、先程の幹部との対峙の際、創平はしきりに彼らの右肩ばかりを気にしていた。でも、もしそれが本当ならば。

最悪の展開じゃないか？

篠宮は唇を噛んだ。そうだ、彼女の言い分が正しいのなら、我々が探している武下巽は既に死亡しているということになる。こんな小さな子供を遺して、彼は。

彼女は、自分が変なことを言ってしまったのではないかとさらに不安そうな顔をした。それに気がついて、篠宮は素直に詫びた。

「……そうだね。おじさんたちは、桜ちゃんのお父さんのところに行くんだよ」

『彼岸堂』に着いた。連絡を佼輔の携帯電話に入れると、すぐに佼輔と円が飛び出してきた。先に円が車に駆け寄り、後部座席への扉を乱暴に開ける。

「篠宮！ 今度ばかりは殴らせてもらうぞ！」

きつと創平を危険な目に合わせたことへの怒りだろう。その赤い瞳に鋭さが増し、鬼独特の恐ろしい形相へと変化している。篠宮は短く、

「子供がいるんだ。怒鳴るのはやめてくれ、説教はあとで聞く」

そして助手席の桜を見遣る。彼女は、突然現れた円に驚いたのか目をぱちくりさせている。だがすぐに「本当は怖い人ではなさそうだ」となんとなく思ったらしい。にっこり、と無防備に笑いかけてきたのだった。それに驚かされたのは円の方だ。まず自分の姿が見えているということ、それから「コイツ、全然ビビらないんだけど何で？」というところに思考が持っていけたらしい。

「早く乗れ、詞喰鬼。その子は武下桜ちゃん、四代目から聞いているだろ？ 武下巽の娘だ」

円が乗り込んだのと同時に、反対方向から佼輔が乗り込んできた。おそらく篠宮の様子からして右側には円がいるのだろうと思ったように、わざわざ反対側へと回りこんできたのである。

「篠宮。お前、減給モンだぞ」

こちらでも乗り込んで早々、短く文句を言った。表情からして相当怒っているらしいが、今ここで篠宮を責めている場合ではないと理解している。これがおそらく、円との違いだ。

「すみません、俺のせいで……」

「まあ、創平の奴がタダでやられることはないとは思うがな。ええと……」

そして、佼輔は助手席に座っている桜へと顔を覗かせた。「君が武下桜ちゃんだね。僕は芦田佼輔。お父さんのお友達だ」

車が発進する。篠宮が指示を仰ぐと、佼輔は繁華街だ、と鋭い口調で言い放つ。

「あとは、多分隣にいるんだろう詞喰鬼から聞け。そいつと創平はいろんな意味で『繋がっている』。それを手繰ってもらえ」

「多分って。見鬼がないと大変だな。篠宮、右」

円の言葉は、校輔には届かない。姿が見えなければ、その声すらも聞こえない。篠宮が返事したので、やはり己の隣には得体の知れないものがあるのだろう。全くもって理解できないが……しかしまあ、それで創平の元へ辿り着けるのなら。得体が知れなくとも、利用できるものはとことん利用しておくべきだ。

「次は左。……校輔のやつ、本当に見えてないのか。つくづく、芦田の人間としては変わってやがる」

「普通は見えないものだよ、詞喰鬼」

篠宮が唐突に口を開いたので、校輔がぴくりと眉を動かした。

「隣の奴、なんて？」

「いや、たいしたことでは。『本当に見えていないのか』だそうです」

「あつそ。見えねえよ。つたく、親父も祖父ちゃんも揃って一人で話し始めるから、気味悪いつつうの」

不服そうに校輔が口をとがらせた。「……だから、あいつらは創平がいいんだろ。あいつの方がよっぽど芦田『らしい』」

ふと垣間見せた彼の本音に、篠宮も円も口を閉ざしてしまった。

そうだ、彼は名目上四代目芦田團十郎ではあるが、本来襲名する際に持ち合わせているはずのものをほとんど持ち合わせていなかった。見鬼もまた、然り。校輔の性格を考えたら、それを気にしないはずがないのである。

「失礼。余計なことを言ってしまった」

その沈黙に耐えかねて、ごまかしのために校輔はひとつ咳払いする。「とにかく、早く行くことだ。桜ちゃんのことを考えて、出来る限りの安全運転で」

十

創平の口から「勝負」のコールがかかる。第四回戦が終了。役の七文以上の獲得により、配点は二倍。三十六文を獲得した創平は、

次に向けて札を切り始める。

青タンで十五文、カスで三文　久しぶりとはいえ、腕が鈍っている感覚は否めない。そりゃあそうだ、あの夜を最後に、賭けことから完全に手を引いていた。花札に触れること自体、六年ぶりなのである。

札を八枚引き、同数を相模にも配分する。そして彼らを隔てる机の上に、絵柄を表に向けて札を並べてゆく。親は創平だ。

簡略版のルールで行うことは事前に相模との了解を得ている。そこまで長引かせる勝負ではない、ということだろうか。これ幸い……と思っていたところだが、全六回戦の間に、さつさと二〇〇文稼いで終わらせてしまいたい。長くなればなるほど自分が辛くなる。これが創平の本音である。

数回札を取ると、すぐに組み合わせはできた。

三光。

「こいこい」

まだ手元には半分以上の札が残っている。ちらりと相模の右肩を見ると、やはりそこには通常視えてはならないものが視えていた。

別にイカサマしている訳ではない。そこに、俗に言うところの“幽霊”がおぶさっているのである。青白い光に包まれながら、その“男”はじつとこちらを見つめている。一回戦が始まる前に、創平は相模に「ここ数日、自分の姿を鏡で見たことがありますか？」と念のため確認してみたが、彼は曖昧に笑い、

「え、俺の顔になにかついてる？」

と言っただけだった。やはり、創平の目は通常の人間とは大分異なるようだ。自分で言うのもなんだが……できることなら、普通に戻りたい。

そう考えているうちに、再び己の手札が整った。カス。これ以上やっても勝機は見えない。既に七文以上獲得は確定しているので、創平は続けて「勝負」のコールをかけた。

「さすが、出入り禁止の称号を持つ帷子君だね」

「どーも。褒められて嬉しいもんじゃねえっすけど」

つい昔の口調がついて出て、心の奥底に嫌気の塊がどろどろと溜まってゆくのが分かった。ああ、こんなこと、もう二度とするもんか。そう思っていたのになあ、と彼の後悔は次から次へと垂れ流されてゆく。

再び相模の肩を見つめると、“男”の表情が若干変わったのが分かる。嬉しそう、と言ったら語弊があるのかもしれない。能面のような状態から、ほんの少しだけ口の端が上がったのである。その頃には札を切り終わり、各々に配布し終えたところだったので、創平はてつきり「あっちの札はかなり揃ってるのかなあ……」と思っってしまったほどだ。だが、その真意はすぐに知ることとなる。

机上に札を八枚並べようとした刹那、ノックもなしにあの中年男・行平が入り込んだのである。

「大変です、若頭！」

「ノックくらいしろ、行平」

相模が窘める口調で言うと、それどころじゃないと言わんばかりにまくし立てる。なんだ、敵対するヤクザでも殴りこみに来たか。

「芦田佼輔が乗り込んできやがりましたッ！」

聞き慣れた名だ。まさか、と創平は思う。彼の知る中で、芦田佼輔はただひとりだ。もしや相模には同姓同名の知り合いがいるのでは、と思ったが、彼の忌々しげな表情から察するにおそらく同一人物を想像しているのだろう。佼輔は、一度この松本組を半分潰した男。まして、この相模は数十分前に「創平が欲しい」発言をした男だ。前回創平を奪取した男の話など聞きたくないはずである。

……だから、なんでおれがいつもそういう対象になるんだよ。みんな趣味がおかしいんじゃないの？

相変わらず、緊迫した状況でずれたことを考える創平である。

額に手を当て渋い顔をした相模は、溜息混じりに行平に言い放った。

「排除して。多分無理だろうけど」

「善処します」

行平が再び部屋を出て行ったのを確認してから、相模は「仕切り直し」と胸の前で手を打った。創平はただただ生返事をするだけである。

「さあ、続きを」

八枚の札が露わになる。親は引き続き、創平だ。

部屋の外からぎゃあぎゃああと喚く声が聞こえてくる。倭輔と

ああ、円の声が混ざっている。おそらく本格的にもめているのは倭輔だけだ。円は、あの連中には見えない。そもそも円が人間相手に興味を持つことの方が圧倒的に少ないのである。だから、だろうか。彼の声がすぐに創平に向けられたものだと思えてきたのは。

「またお前の人生無駄にする気か！」

無駄にする気なんか、さらさらないよ。

ふ、と自然と唇から笑みがこぼれた。理解してくれないなら、それでいい。

創平は思う。

ただ、決着をつけておきたかった。自分と、目の前のこの男と。昔の自分とは違うということ、この男に分からせてやりたかった。ただ、それだけなのかもしれない。これはエゴだ。

組ができた。月見酒。……ただし、雨流れ。点は入らない。

試合はまだ続く。向こうもそれなりの枚数を稼いでいるし、初回配分の八枚の中に自分にとって不利となる強力な札が紛れているのかもしれない。

同じエゴなら、なるべく「自分がそう在りたいと願うかたち」でいるべきだ。

創平が札を取ると、倭輔が部屋の扉を突き破ったのはほぼ同時だった。だが、創平は目もくれない。続いて飛び込んできた円が、唯一彼の異変に気がついた。

普段から創平にまわりつく『不幸』が、なんだか妙に増幅されている。

「そうへ……！」

「勝負」

雨四光。

七文以上獲得により、得点は二倍、したがって四十二文。よって、創平の獲得点数は総じて二〇〇文。相模から持ち点をすべてもぎ取ったことにより、彼らの勝負は終わりを迎えた。

ほっとして創平が手持ちの花札をテーブルに置いた。

刹那、焼けるような痛みが全身を駆け巡った。体液が身体を巡るように、その痛みは四肢の自由を奪ってゆく。

「ッあ……！」

創平の左手首から突如縹色の炎が噴き出した！

通常人間には視えない、かの『鬼火』が渦を巻いて相模に襲いかかる。炎の根源である創平ですらその猛火に飲み込まれ、円には姿が見えなくなってしまうた。異変はそれだけではない。はっとして円が交輔や行平に目をやると、彼らにもその炎が視えていたのだ。顔面蒼白で、炎に呑みこまれた二人を呆然と見つめている。

一体彼らになにが起こったのか。円は、炎に呑みこまれる寸前の相模の右肩を思い出した。“男”が相模の背中におぶさり、右肩からひよっこりと顔を覗かせている。相模はそのせいで上手く動けなかったのだ。

「あの男……！」

間違いなかった。おそらく、『鬼火』の異常燃焼も半分は“男”のせいだ。もう半分は、本人の問題だろう。

円は炎の中にその身を投じ、そのまま創平を後ろから抱きしめた。じりじりと凍れる炎の冷たさが円の頬に伝わってゆく。そしてそのまま創平の左手首　鎖型の痣に触れ、これ以上『鬼火』が燃え広がらないように強い念を込めた。

「聞こえるか、創平」

耳元で声をかけると、創平はゆっくりと首を縦に振った。かろうじて意識はあるらしい。ほっと胸をなでおろし、円は彼に炎を抑え

込むように告げる。

「違う」

それに反論したのは創平である。「これはおれの意思じゃない」
「だが、“不幸”が過剰反応しているぞ。これ以上『鬼火』を燃やし続ければ、核であるお前の命が危ない」

創平は首を横に振る。コントロールが効かないんだ、とかぼそい声で彼は言う。

相模が目の前で悲鳴を上げながら炎に呑みこまれた。彼の眼にも『鬼火』が視えている。本来実害がないはずの炎だが、思いこみの力が働く可能性がある。このままでは全身火傷にもなりかねない。円は小さく舌打ちし、怯える創平の身体を己へと向けた。今にも泣きそうな創平の表情。

「こんなに燃えるってことは、お前が現在進行形で相当の“不幸”を思い出しているってことじゃないのか？ お前はもう、昔とは違うんだろ？ お前はもう“あの”帷子創平じゃない。今は芦田創平、だ」

言い返すための言葉はいとも容易く飲み込まれてゆく。

創平は驚きのあまり目を瞠っていた。唇に感じる柔らかさ。円に口付けされていると気がつくのに、そう時間はかからなかった。

5（完）

一瞬、炎が和らいだ。

効かないとは分かりつつ、超常現象に慣れていない倭輔は、至極全うに消化器を持ち出し炎に噴射していた。案の定あの炎は消えるどころか勢いを増すばかりで、目の前で飲み込まれた創平の姿も依然捉えることができない。一体どうしたらいいのか分からず、ただ焦りばかりが募る。それは、腹を括っていつそ飛び込むか、と思つた矢先の出来事だつた。

和らいだ炎の向こうに、創平の姿が霞んで見えた。ほつと胸をなで下ろした倭輔。だが、彼はなぜか「ひとりではなかった」。

輪郭はぼんやりとしているが、一緒にいるのはどうやら己と同年代の男らしい。黒くやや長い髪に、赤褐色の瞳。思わずぞつとするほど美しいその青年は、立ちすくむ創平の腕を引き、キスした。さすがに倭輔は動揺した。同時に、その青年の正体がなんとなくだが理解できた気がする。

間違いなく見たことはないはずなのに、「知っている」。彼の記憶に該当する人物は、ひとりだけだ。

あれが、皆の言う「詞喰鬼」か。

何故今このタイミングで視えてしまったのか、と思つたが、かの鬼の行為によつて縹色の炎が和らいだのは事実。創平のことはおそらくあの鬼がどうにかしてくれる。ならば、自分は相模をどうにかしなくてはなるまい……もちろん、嫌嫌でしかないが。

ためらいなしに、倭輔はその身ひとつで『鬼火』に飛び込んでいった。無謀にも程があるが、彼にとつてそんなことは心底どうでもよかった。熱さは感じない。むしろ極寒の地にろくな装備なしで飛び込んでいったかのような、猛烈な寒さが全身を襲う。

この炎は、創平が生み出したものだとするならば

倭輔の目に、人影が映る。相模だ。彼は気を失ってしまったらし

く、ぐらりと体が斜めに傾いた。崩れ落ちる刹那、慌てて右腕を取る。そのまま引つ張り上げようとしたが、それを何かが静止した。倭輔の手に重なる、全く別の感触があった。

「人の、手……？」

ふと顔を上げると、相模の肩に何かがある。黒く靄がかつてよく見えないが、おそらく多分、“幽霊”とかいうやつだと彼は直感した。ゆらりと立ち上るそのひとつの影は、まるで蜃気楼のように捉えどころがない。だが、よくよく見てみるとその影の形には見覚えがあった。

そうだ、見たことがある。以前『隻影』の調査資料で確認した、現在最も保持している疑いが強いとされていた人物の顔だ。倭輔は小さく舌打ちした。

「武下、異か……！」

たったひとつの影は、頷きもせずただ倭輔の行動をひたすらに止めようとしていた。彼は、このまま相模を消し去ってしまいたいのだろうか？ そもそも、そんな形になっているということは、武下自身の生存はもう絶望的ではないか。死して尚、彼は相模を炎の渦につき落そうとしている。

違うだろ、と思った。

本当はもっと、彼にはやるべきがあったはずだ。先程まで一緒に車に乗っていた、まだ幼い彼の娘。あの子を育てたくはなかったのか。見守ってやりたくはなかったのか。こんな男を貶むことが本望ではないだろう！　そこまで自分を貶めるんじゃない！

「っ、悪かった！」

そう思ったら、倭輔の口からそんな一言が自然と飛び出していた。燃え盛る炎の中、彼の言葉はこの黒き隻影に確実に届いているようだった。その証拠に、倭輔に触れていた力が弱まる。倭輔は続けた。「あなたがこんなことになったのは……三代目・芦田團十郎が無理に『隻影』を武下氏から奪ったからだ。それを利用しあなたを直接貶めたのは相模ですが、元をたどれば私たちが悪い。恨むなら……」

どうか」

四代目である俺を、と言いかけたところで、少し離れたところから別の甲高い声が上がった。こんな場所に似つかわしくない、可愛い少女の声だ。その声の正体は知っている。武下桜だ。

振り返ると、腰を抜かしている行平たちの中、呆然とした様子で立ちすくむ桜の姿があった。後に篠宮が追いかけてきたところを見ると、彼女は何かを察知して篠宮の元から逃げ出してきたらしい。その何かとは、おそらくこの場所にいる父親のことだ。

決定的だった。ゆらりと黒の隻影が動く。そして、炎の中をずり泳いで、桜の元へと近づこうとした。だが、炎の正体は本来“不幸”を触媒にする『鬼火』。それに捕らわれた武下が、炎から抜け出すことなどできない。今の武下は、まさしく“不幸”の塊なのだから。

その隻影を包み込むなにかがあった。……創平だった。黒の瞳はうつろで、円に支えられながらやつのことで立っている。『鬼火』の影響を受けているのは、武下だけではない。触媒である創平も体力を使いすぎて満身創痍なのだ。しかし、今は動揺した気配などこれっぽちも見せず、凜とした表情を伸びる隻影に向けている。

「行きましよう、巽さん」

創平が言つと、影は僅かだが頷いて見えた。

ふらつく足取りで創平は円と共に歩き、ゆっくりと桜に近づいた。そして呆けた表情でこちらを見上げる彼女にそっと笑いかけ、膝を折った。

「おとうさん……？」

桜が呟くと、影も創平と同じように、彼女の目線に合わせてしゃがみこむ素振りを見せた。創平の炎に焼かれたせいで傷だらけになっているが、きちんと彼は己の娘の前に姿を見せている。ありのままを。

「さよならなの？」

彼女の言葉に、この男はなんと思っただろう。しばらく桜の姿を見

つめたのち、納得したように頷いて見せたのだった。創平には、はつきりと視えていた。このとき、“男” 武下巽が、誰よりも優しく、いとおしむように彼女に微笑みかけていたのだ。

影がどんどん消えてゆく。足元から徐々に、縹色の炎に溶けて混ざってゆくように。桜は決して泣かなかった。じつと唇を噛みしめ、懸命に堪えている。本当は泣きたいのかもしれない。だが、彼女はそれを良しとしなかった。

そして、……彼女は大きな瞳に涙を浮かべながら、最上級の笑みを見せた。

「ばいばい」

“男”の隻影は、もう残っていなかった。ただそこにあるのは、創平が放った縹色の炎だけ。同時にがっくりと創平の身体が傾いたのを、円が必死に支える。創平は意識を失っていた。完全にオーバー・ワークである。これだけ盛大に炎を燃やせば、当然か。

ちよつとやりにくいのが、と円は無理やり印を結ぶ。肝心の触媒が役に立たないのでは、主である『詞喰鬼』が強制的に喰らう以外に炎を収束させる方法がないのである。祈りの姿にも似たその体勢、突然軽くなったのは 佼輔が創平を肩代わりしたからだった。彼の口元には、自ら回収した『隻影』が咥えられている。佼輔と円の視線が交わった。

ようやく視えたか。それでこそ、芦田の子だ。

円がニヤリと笑い、己の祝詞に願いを込めた。

再び彼らが『不幸』に取り憑かれることのないように。武下も、その子供も、相模も、……そして、創平も。

集まりだした大量の『鬼火』。円は舌先でそれをなぞり、冷たい感触の中に宿る極上の『不幸』の味を堪能した。これはきっと、今までに類を見ない素晴らしい味がするのだろう。

「背負ってやるよ、あんたらの『不幸』」

何年も見ていれば分かる。人間は救いようがないほどに弱くて脆い。そのくせして、たまに何かの拍子に不思議な熱を見せつけてく

る。本当は、鬼が喰らってやらなくとも『不幸』を打ちのめすものを持っているくせに、誰も気がつかない。だから、まだ鬼が『不幸』を喰らってやる必要があるのだ。そのための『詞喰鬼』。そのための『不幸』。

「ま、別に気付かなくてもいいけどさあ」

そうして、彼は炎を一気にかつ食らった。

十

ふ、と創平は目を覚ました。ずっと眠っていたせいで喉はカスカスで、おまけにたくさん汗をかいたらしい。ほんの少し、だるいような不思議な寒気が背筋を走っていった。ゆつくりと己の右手を額に押し当て、その冷たさに思わず目を細める。

どこだ、ここは。

『彼岸堂』に構えた自室でもなければ、財団の寮にある自室でもない。畳に敷かれたふかふかの敷布団にその身を沈めている創平は、無意識に畳独特の爽やかな香りに反応し鼻を動かしていた。木目が整然と並ぶ天井をじっと見つめながら長いこと考えて、ようやくこの場所を特定することができた。

三代目團十郎・清和の邸宅だ。

その時、す、と襖が引かれる音がした。

「あら、創平さん。目が覚めましたか」

その穏やかな口調の女性は、清和の抱える使用人の一人である。確か、創平が養子縁組を結んだ年にやってきた人物で、年齢も使用人の中では一番創平に近い。名前は……そうだ、寛子ひろこ、だ。森内寛子。

創平は挨拶のために上体を起こそうとしたが、すぐに眩暈がしてふにやりと布団に突っ伏してしまった。それを、慌てて寛子が窘める。

「駄目ですよ、まだ寝ていなくちゃ。あなた、三日も眠っていたん

ですよ。動くにしても、なにか食べてからにしてください」

「ああ、おれ、三日も眠っていたのか……」

ええ、と寛子は首を動かした。創平の右側に位置する障子を大きく開け放ち、す、と息を吸い込みながら。障子の向こうには、清和が愛する日本庭園が広がっている。季節は冬なので今はどの木々にも藁が巻かれているが、もっと温かなれば梅の花も咲くし、つつじだって咲く。義父は意外と草花が好きなのである。

「……そうだ、倭輔さんからなにか聞いていませんか。本について、そこでようやく、彼は例の『隻影』について思い出した。彼の記憶によると、相模氏との対局ののち、己が放つ『鬼火』によって武下巽の魂を相模ごと焼いてしまったはずだ。武下が持つあまりに強い『不幸』に過剰反応し、己の炎が自らを焼いて

体に痛いところはないので、怪我はしていないはずだ。それより、あの本はどうなったのだろう。そして、武下の娘である桜は。それが気になって仕方がなかったのである。

答えを急かす創平に、寛子は非常に困った様子で肩を竦め、

「それはご本人から直接伺ってください」

と言った。はぐらかした、の方が正しいか。『本人』の一言に少々疑問を感じた創平だったが、その答えはすぐに分かった。廊下の大分遠くの方から、二人分の足音が聞こえてくる。

「よう。お目覚めか」

ひとりには倭輔だった。彼の名を呼ぶ前に、倭輔の横から飛び出した「誰か」が創平に飛びついてくる。大ききの割に軽い身体。視界を掠めるやや長めの黒髪。間違いない、円だ。

ほっとして、創平も彼にそっと腕を回した。

「まどか」

「この馬鹿」

円の第一声は実にひどい台詞だ。「あんなに燃やすやつがあるか。あの炎は、お前の命だって言っているだろうが……寿命を削ってどうするつもりだ」

「うん。ごめん」

「絶対分かってないだろ。お前は俺と一緒にいたくないのか」

「……ごめん」

円の話尾が、僅かに震えている。それに気がついて、安心させようと創平は回した腕にぎゅっと力をこめた。

あの炎の中で円が怒鳴った言葉も、しっかりと覚えている。あのとき、本当は不安だった。今までなるべく“芦田”の名を使わないようにしていたのは、自分が過去と決別できていなかったからだと嫌でも思い知らされた。心のどこかで、『不幸』な帷子創平が変わらずに存在していた。だからあんなことになったのに。自分は馬鹿だ。創平は思う。

不安だったのは、別に自分だけではなかったのだ。どうしても気がつかなかったのだらう。あのとき己を叱った円も、また不安でしゅうがなかったのだ。それが分かるからこそ、創平は今抱きついたまま離れようとしない円をむやみに突っぱねようとは思わなかった。幸い、佼輔も寛子も見鬼ではない。視えなければ恥ずかしくないじゃないか。

こんな調子で一人勝手に納得した創平。ところが、不機嫌そうな表情で創平を見下ろして佼輔が、ゆつくりと創平の頭の横に座りこんだ。そして、驚いたことに円の頭をがっちりと掴んだのである。

「こら。うちの義弟おとうこにくつつくな。創平も好きにさせるんじゃない」とのお叱り付きで。

一体なにが起こったのか訳が分からず、ぽかんとしてしまったのは創平である。何度も繰り返し言うが、佼輔は見鬼ではない。見鬼がないからこそ、今の自分が芦田の名を冠している訳で。あれ、じゃあ今の行動はなんだ？

「こ……こーすけ、さん？」

恐る恐る尋ねると、ひつpegがされて超絶不機嫌になった円がおもむろに口を開いた。乱暴に人差し指で佼輔を差し、

「こいつ、この間の創平の『鬼火』に感化されてっただけ見えるよ

うになつたらしい。微かに、声と影を捉えるくらいのレベルだが」
そして露骨に佼輔を睨めつけた。「ああ、そこの鬼どもよりはるかに見目麗しい俺が、その辺の雑鬼と一緒に視えるなんてな。片腹痛いわ、四代目！」

「安心しろ、鬼には視えない。俺には黒くてでっかい狗にしか……」
「誰が狗だ！ アレと一緒にするな！」

また妙な争いが生まれそうだったので、慌てて創平が仲裁する。
というか、一体なにしに来たんだ、この連中は。

なんとかその場を収めると、気を取り直し先程寛子に尋ねたことをそのまま佼輔に尋ねた。

渋い顔をしたのに、創平が気づかないはずがない。

「……森内さん、お仕事申し訳ありません。彼女をここに連れてきていただけますか」

「かしこまりました、四代目」

佼輔の言葉に、寛子が一礼し、すぐに部屋を出て行ってしまった。
単に人払いしたかったのか、それとも。

判断できず言葉に窮していると、佼輔はようやく口を開いた。

「結論から言う。『隻影』は、無事『彼岸堂』に戻ってきた。これといった損傷もない。窃盗を行ったのは、松本組の……相模礼一直属の幹部だそうだ。証拠も出揃っているし、本人も認めているらしい。礼一自身は教唆にあたるとして逮捕された。もちろん正犯扱いだが、おそらく罰金程度で済むんじゃないかって話だ。本当は武下巽にも罪が及ぶはずなんだが、」

その、と珍しく佼輔が言葉を濁した。「……武下の死体が、近くの山林で発見された」

「そうですか」

創平はやはり、と言わんばかりに、深い溜息をついた。やはり、相模の右肩におぶさっていたあの“男”は武下巽だったのだ。篠宮が連れてきた桜を見て、ほんの少しだけ微笑んだこと……今も、はつきりと覚えている。きゅうつと胸が締め付けられるような思いが

して、創平は苦しげに眉間に皺を寄せる。

「警察では、今のところ自殺と他殺両方から捜査しているらしい。例の幹部は関与を否定しているが……うん、そのあたりはもう俺たちの管轄から外れている。あとは警察に任せるべきだ」

「なるほど。大体分かりました。……おれには、何か処罰などはありますか」

「自宅謹慎二週間、だそうだ。親父が言うことだ、素直に従っておけ。篠宮も同じだ。そもそもお前ら、好き勝手に動きすぎなんだよ。あの状況、幼女誘拐だって言われてもおかしくなかったんだぞ。篠宮をつけておけば安心かと思ったら、あいつまで常識から逸脱した行動を取りやがって。いいか、芦田財団は信用を売りにしているんだ。……軽率なことは、するんじゃない」

叱られるのは当然だ。それをきちんと理解しているからこそ、創平は口答えなどせず、素直に謝罪の言葉を述べた。謝って済むことではないと分かっている。だが、今の自分ができることはそれくらいだ。

その様子を見て、校輔もふっと息を吐き出した。

「まあ……親父が二週間の謹慎を言い渡したのも、おそらくお前に十分な休養を取らせたかったからだろう。存分に休んで、あとのことはそれから考える」

その時、ぱたぱたとスリッパの音が廊下の向こうから聞こえてきた。寛子が『誰か』を連れて戻ってきたのである。幾分ゆっくりとした歩調になっているのは、その『誰か』の歩幅に合わせているためだ。小さな体は、創平が知るものより大分しっかりとしていた。

子供独特のどっしりとした立ち姿に、不思議と安心するものがある。「桜ちゃん……？」

そう、寛子に連れられてきたのは、あの武下桜である。校輔の口ぶりからすると、彼女はきちんと家庭調査官に預けられたはず、だが。

桜は創平が目を覚ましていることをとても嬉しく思っているよう

で、すぐにぱつと明るい表情に変わった。本当は今すぐにでも飛び付きたい、といった様子だが、気を遣ってかすぐに駆け寄ろうとはしなかった。円とは大違いである。

「ちよつとした報告だ。俺たちに、今度新しく妹ができるらしい」「へえ……って、今、何と？」

「まだ正式手続きは済んでいないが、あの子はうちで引き取ることになると思う。……元々、武下の一族から無理に『隻影』を引き離したせいで武下巽があんなことになったんだろ。あの子の幸せを奪ったのは俺たち大人だ」

だからせめてもの償いに、と三代目が彼女を引き取りたいと申し出たらしい。彼女を幸せにしてやりたい、なんて言葉は結局のところ大人のエゴでしかない。それは分かっている。だが、しかし。

「同じエゴなら、あの子をひとりにするエゴじゃなく……出来合いだけど、家族を与えるエゴの方が幾分マシじゃないか。将来、恨まれることになるとは思っけれど。これは芦田が継ぐ罪だ。俺もお前も、絶対に忘れてはならない」

「佼輔さん……ちよつとだけ、反論していいですか」

おいで、と創平が呼ぶと、嬉しそうに桜は佼輔と円の間を割って入った。そして、数日前創平が彼女にしてやったように、今度は桜が創平の頬に手を当ててくる。だいじょうぶ？ と可愛い声で尋ねてくるので、微笑ましいと思いつながら創平はゆっくりと首を縦に動かした。

「多分、この子は恨んだりはいらないと思う。この子は、自分の父親が見せた最期の顔を知ってる」

恨むとしたら、その対象は芦田ではないだろう。創平は続ける。

「それよりも、おれは彼女がもう二度と悲しまないように、幸せでいっぱいにしてあげられたらと思うんです。甘い考えでしょうか？」

いいや、と佼輔は首を横に振る。

「……お前らしいよ、本当」

だから好きなんだ、とは言わず、彼もまた桜の頭を撫でてやった

の
だ
っ
た。
了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4217p/>

隻影 彼岸堂図書館目録 2

2011年2月28日23時25分発行